

# 『手技図形』と『小学校教師用手工教科書』の関連に関する研究

清原 みさ子

## はじめに

本論集第43号の「明治期幼稚園における手技と小学校における手工科の教育内容の関連に関する研究」の中で、『幼稚園恩物図形』<sup>1)</sup>『手技図形』<sup>2)</sup>と『尋常高等小学手工製作図』<sup>3)</sup>の比較検討を行った。その後、『小学校教師用手工教科書』<sup>4)</sup>のコピーを入手することができたので、ここでは主として『手技図形』と『小学校教師用手工教科書』のそれぞれの内容をおさえた上で、この2冊を比較し、幼稚園における手技と小学校低学年の手工科との内容の関連について、改めて検討したい。

## 1. 『手技図形』

### (1)『手技図形』が出されるまで

1876（明治9）年に日本で最初の幼稚園といわれる東京女子師範学校附属幼稚園が設立され、フレーベル（Fröbel, F. W. A）とその弟子たちによる恩物と作業が保育に取り入れられ、重要な活動とされてきた。しかし、もともと幼稚園の対象年齢のみではなく、それに続くいわゆる媒介学校・学級、さらにその上の学校年齢で取り上げることとして考えられていた内容まで幼稚園で取り入れてしまい、幼児たちには難しすぎることを無理に教えるような状況を生み出した。それが型にはまった恩物使用への批判を生むことにつながっていった。明治20年代の終わり頃から、幼児に難しすぎる内容は取り上げられなくなり、少しづつ変化していった。環と箸と一緒にして工夫して並べさせたり、自由に作らせたりすることがみられるようになっていった。

1899（明治32）年の幼稚園保育及設備規程で、保育項目は「遊嬉、唱歌、談話、手技」となり、恩物と作業は手技の中にまとめられ、保育内容に占めるそ

の比重は低下することになった。1903(明治36)年の『婦人と子ども』に、この4つの保育項目に基いた「保育要項」「保育事項実施程度」が掲載されている<sup>5)</sup>。これを元にして、『女子高等師範学校附属幼稚園保育要項』<sup>6)</sup>が出される。その中に、保育項目別に「実施程度」が書かれている。その手技の「実施程度」に対応した図集として出されたのが『手技図形』である。出されたのはどちらも1906(明治39)年である。

## (2) 題目

「実施程度」と『手技図形』の題目には若干違いがみられるが、ここでは『手技図形』によることとする。

『手技図形』には、「積木」「板排べ」「箸環排べ」「貝排べ」「紐置き」「画キ方」「豆細工」「粘土細工」「紙剪り」「紙摺み」「紙織り」「紙組み」「縫取り」が取り上げられているが、ここでは『小学校教師用手工教科書』との比較のため、「板排べ」「豆細工」「粘土細工」「紙剪り」「紙摺み」を取り上げる。

「板排べ」では、「汽車」「雁」「門」「燈籠」「汽車」「船」「燈籠」「紋形」「橋船」「手籠」「船」「紋形」「家」「風車」「汽車」「紋形」「植木鉢」「紋形」「堂二鳩」「菖蒲ニ蝶」の20の図が上げられている。

「豆細工」では、「亜鈴」「独楽」「弥次郎兵衛」「四角」「鏡」「風車」「旗」「魚」「机」「屏風」「梯子」「竹馬」「犬」「鳥居」「熊手」「箱」「手籠」「家」「建札」「椅子」「吹流シ」の図がみられる。

「粘土細工」では、「球」「球竿」「桜実」「飾餅」「林檎」「卵」「盆」「盆ニ模様」「盆」「胡蘿蔔」「慈姑」「花瓶」「太鼓」「臼杵」「正方形」「火鉢」が上げられている。

「紙剪り」では、「一」「二」「三」「四」「五」「六」「七 独楽」「八」「九」「十」「十一」「十二」「十三」「十四」となっている。「独楽」以外はすべていわゆる「紋形」の模様であり、具体物はわずかであることがわかる。

「紙摺み」では、「本」「屏風」「肩掛」「山」「船」「バツタ」「蝶」「雀」「座蒲団」「煙草入」「家」「帽子」「二艘船」「団扇」「襦袢」「塵取」「兜」「蝉」「狐ノ面」「三角」「紋形」「蓮花」「襦袢」「股引」「鉄砲船」「二艘船」「帆懸船」「風

車」「紋形」「宮」「朝鮮船」「三方」「四足三方」「角香箱」「鯨」「鶴」と、幼稚園で折紙がよく行われていたことを反映して、多くの図が上げられている。

## 2. 『小学校教師用手工教科書』

### (1) 『小学校教師用手工教科書』の出版とその特徴

1904(明治37)年に「甲」「乙」「丙」「丁」の4分冊として出版された。1903(明治36)年に小学校用教科書が国定となるが、手工科の教科書は除外され、「文部省が著作権を有するもの及び文部大臣が検定したものの中から、府県知事が之を探定すること」<sup>7)</sup>となっていた。さらに児童に使用させる図書を決めなくとも良かったし、「手工科不振時代であったから、良教科書の多く出なかったのは必然であった」<sup>8)</sup>という。文部省は手工科に教科書がないことを問題であると考え、上原六四郎と岡山秀吉に編纂を委嘱した。

手工科は、1886(明治19)年に高等小学校の科目として、1890(明治23)年には尋常小学校の科目として加えられ、明治20年代に一時的にかなりの広がりを見せた後、製作品の精巧さや程度の高さを競い合ったり、製作品を売却して得たお金を貯蓄することが流行したりという状況で衰退した。その後の手工科が不振な時代に編纂された。

この書の編纂の目的は、「教則の許す限の広き範囲内に於て手工を教授する」<sup>9)</sup>ことで、手工科のように経験の乏しい教科ではなるべく教材を豊富にして教師が選択するのに便利なように、また順序の変更や材料の取捨により編成の異なる小学校に適用するのに便利なように考えられている。

手工教材の選択に関しては、「成るべく種々の材料及び工作法に接せしめて技能の一般的基礎を養成せんことを期し」て、「幼稚園の手技に於けるが如き最も簡易なるものより漸次実用的の複雑なるものに及ぶ」という考えにより、「色板排、豆細工、粘土細工、折紙、切貫、紙撲、結紐、厚紙細工、製本、縫取、竹細工、木工、金工及び鋳型細工」が選択されている<sup>10)</sup>。

教授題目の選定に関しては、「日常接触してその観念の明瞭にして且興味に富めるもの」で、「尋常小学校に於ては図画、算術及び国語中の形体に関する事項に連絡」したものとされる<sup>11)</sup>。

## （2）『小学校教師用手工教科書』の内容

第1学年では「色板排、豆細工、粘土細工、折紙」が、第2学年では「粘土細工、豆細工、折紙、紙撲、結紐」が取り上げられている。第3学年では「粘土細工、紙撲、結紐、折紙、紙撲附麻撲、製本」が、第4学年では「粘土細工、切貫細工、厚紙細工、縫取」が取り上げられている。

ここでは、幼稚園の手技との比較のため、第1、2学年用である『小学校教師用手工教科書 甲』を中心に、「色板排」「豆細工」「粘土細工」「折紙」を取り上げ、具体的のどのような題目が上げられているのか、第1学年から細工ごとにみていきたい。

「色板排」では、第1学期に「形の名称」「色の名称」「大なる三角形及び四角形の構成」「色の名称」「国旗」「富士山」「風車」で、補充として「大なる三角形と四角形、釣燈籠」となっている。第2学期に「色の名称、淡色」「雪見燈籠」「街燈」「三角形及び四角形の種類」「正三角形の練習」「菱形の練習」「正六角形の練習」と、補充として「繫菱、正四角形」となっている。第3学期に「水車」「羽子」「酸漿」「蝶」「燕子花」「菱形より成る模様」と、補充として「人形、正六角形、菱形」が上げられている。

「豆細工」では、第1学期に「予備練習」「三角形及びその変形」「四角形及びその変形」「鳥居」「旗」「梯子」「五角形」「六角形」「さらひ」「衝立」と、補充として「四角形、石畳」が、第2学期に「三角錐」「方錐」「旗」「正方体、正方柱、長方柱」「前課諸体の書き方」「椅子及びその書き方」と、補充として「三角形及び四角形に基く模様」が取り上げられている。第3学期には、「模様清明鱗」「模様六花菱」「提煙草盆」「縁台」「家」と、補充として「机」となっている。

「粘土細工」では、第1学期に「球」「卵」「供餅」「賽」「梅実」「梨実」「盆」「環」「慈姑」「栗実」と、補充として「金柑、蠟燭、鍾」が上げられている。

「折紙」では、第2学期に「折紙予習」「紙鉄砲」「長方形のこと及び長方形より正方形を切り取ること」「碁口」「粉類包」「名刺入」「兜」「福助」が取り上げられている。

第1学年は4つの細工で、以上のような題目が上げられている。「粘土細工」

の題目では具体物が多いが、「色板排」や「豆細工」では「図画、算術及び国語中の形体に関する事項に連絡し」と記されていたことを反映して、形体に関する題目が多数上げられていることがわかる。

第2学年の題目は、幼稚園でも行われていた「粘土細工」「豆細工」「折紙」についてみていく。

「粘土細工」では、第1学期に「瓢」「蜜柑」「墨台」「文鎮」「球四個」「台」「三弁八重花紋」「三弁一重花紋」「蕃椒」「茄子」「五弁花紋」「六弁花紋」と、補充として「桃、大根、分銅」となっている。第2学期には「方罫粘土板」「正方形」「四つ目」「十字形」「矢筈違」「風車」と、補充として「四つ目、矢筈違、二の字崩」が上げられている。

「豆細工」では、第1学期に「腰掛」「三角柱」「六角柱」「ぶらんこ」と、補充として「提箱、東屋」が取り上げられている。第3学期には、「正八角形及び角の大小のこと」「水車」「八花菱」「椅子」「寝台」「植木鉢」「街燈」と、補充として「机、椅子、寝台、水晶、段柱」となっている。

「折紙」は第1学期のみで、「蓮花」「提灯」「二艘船、帆掛け船」「扁額、大船」が上げられている。

第2学年でも、第1学年より少ないものの、形体に関する題目が取り上げられている。「豆細工」だけでなく「粘土細工」でも、幾何形体や数種類の「花紋」が上げられている。

なお、「折紙」は第3学年まで取り上げられていて、「鶴」や「燕子花」「蛙」は、第3学年の題目となっている。

『手技図形』では「紙剪り」が取り上げられていて、『女子高等師範学校附属幼稚園保育要項』には「最初ハ諸種ノ形状ノ紙片ヲ与ヘテ台紙ニ貼付セシメ其貼付方ニ熟スルニ至リテ剪刀ヲ用ヒテ自ラ形ヲ剪り出サシム」<sup>12)</sup>と説明されている。だが、「切抜」や「剪紙」「切附」等は、当時の手工関係書の第1、2学年でも取り上げているものがみられたものの、『小学校教師用手工教科書 甲』では取り上げられていない。「切貫細工」が出てくるのは第4学年からで、第1学期でははさみを使い、第2学期では小刀も使うようになっている。

### 3. 『手技図形』と『小学校教師用手工教科書』に取り上げられている内容の関連

本論集第43号では、『幼稚園恩物図形』『手技図形』と『尋常高等小学手工製作図』との比較を試みたが、その後入手した『小学校教師用手工教科書』と『手技図形』の比較を改めてしてみたい。『尋常高等小学手工製作図』の著者は上原六四郎と岡山秀吉であり、『小学校教師用手工教科書』も、文部省が上原と岡山に編纂を委嘱したものなので、この両著書は取り上げられている題目にも共通性がみられる。だが、「色板排」や「豆細工」では違いがみられ、『小学校教師用手工教科書』のほうが、題目が多い。

『手技図形』と『小学校教師用手工教科書』の題目を比較してみると、同じ題目の比率は一見それほど高くはない。それぞれの細工別に見ると、「板排べ」「色板排」と「豆細工」での違いが大きい。それは、この両者が幾何形体と結び付けやすいためだと思われる。幼稚園のほうは、身の回りにある具体物をあらわすことが中心になっているのに対して、小学校では、先にもふれたように「図画、算術及び国語中の形体に関する事項に連絡」し、図形に関する学習の入り口と考えられていることによる。

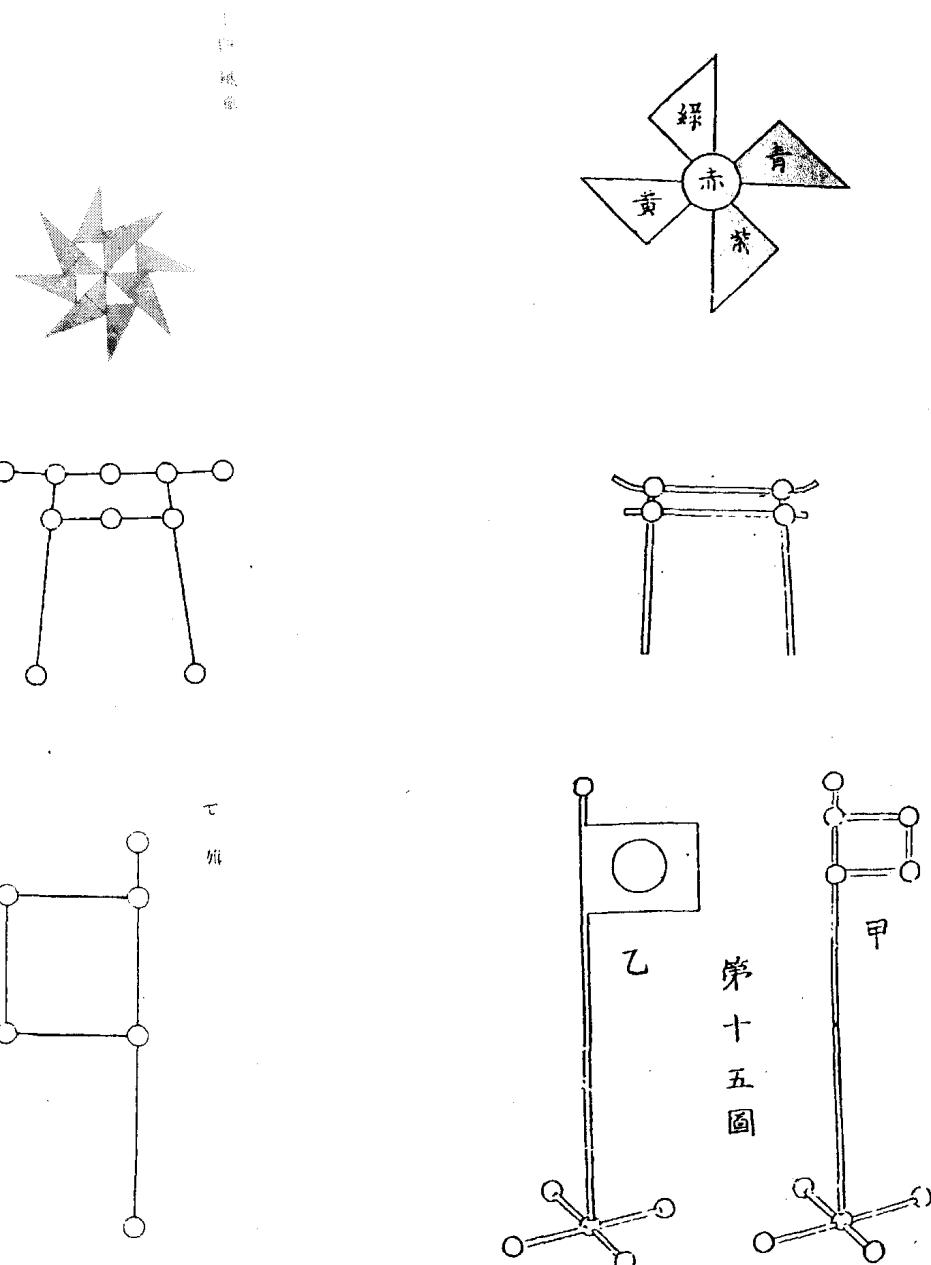
まず「板排べ」「色板排」であるが、『小学校教師用手工教科書』では色や形の名称、大きな三角形と四角形の構成から始まり、さまざまな三角形や四角形、菱形についても取り上げられている。このような図形に関する題目は、「色板排」の20題目の内の6題目と、3割を占めている。「補充題目」を含めると、この比率は高まる。図形を除いて具体物の題目を比較してみると、「風車」や「蝶」が共通である。その形を比較すると、次の頁の図からわかるように、同じ題目でも「風車」のように、幼稚園のほうが複雑な形になっているものもある。

同様に幾何形体の学習に連絡する題目が多く取り上げられている「豆細工」も、幼稚園と小学校の違いが大きい。「色板排」は第1学年のみであったが、「豆細工」は第2学年にも組まれている。「豆細工」が立体的に組み立てができるため、「方錐」や「六角柱」のような形も取り上げられている。こうした形を除いてみると、具体物の題目としては、「旗」「椅子」「鳥居」「家」「机」が共通である。また、本論集第43号で取り上げた「熊手」と「さらひ」、「箱」と

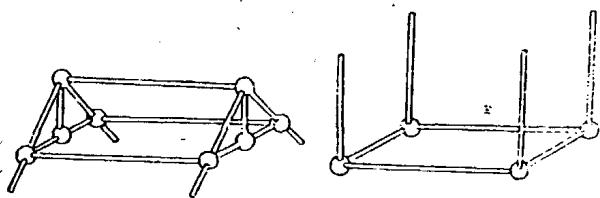
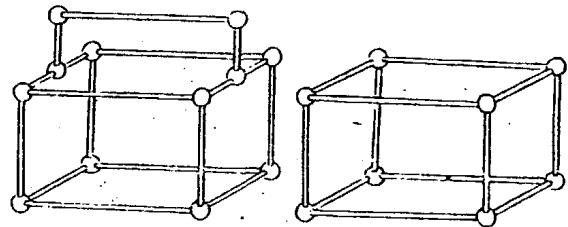
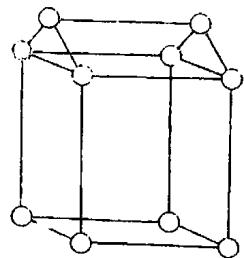
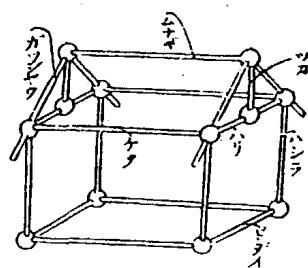
「正方体」のように、名称は異なるが形は同様のものもある。

以下に掲げる図はすべて、左側は『手技図形』、右側は『小学校教師用手工教科書』のものである。

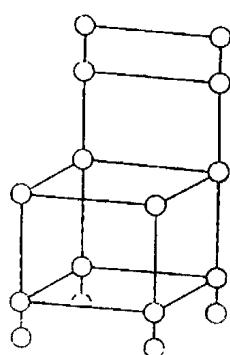
その形を比較してみると、「鳥居」のように幼稚園のほうが複雑なものもあるが、「旗」や「家」のように小学校第1学年では立つようになっていたり、形が複雑だったりして、幼稚園より難しいものもある。「椅子」は、第1学年、第2学年とも取り上げられているが、第1学年のものは図からわかるように幼稚園より簡単な作りである。



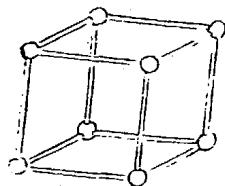
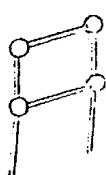
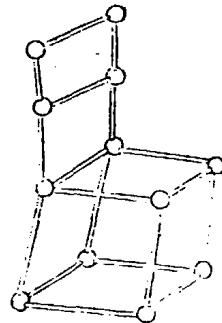
第八十五圖



十八家

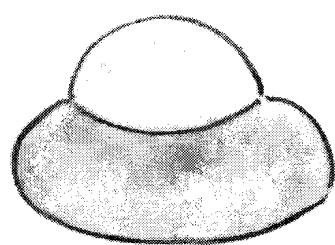


二十椅子

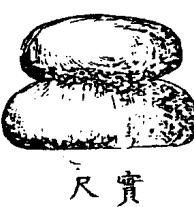


「粘土細工」に関しては、丸めて作る「球」から始めるのは、幼稚園、小学校とも共通である。この細工では、小学校の題目にも、具体物がたくさん取り上げられている。だが、同じ題目は「慈姑」や「大根」くらいで、意外に少ない。身の回りにある具体物は、それこそ数多いので、同じではなくても果物や野菜というようなくくり方をして、その形を比較してみると、共通性は高まる。たとえば、幼稚園の『手技図形』で「桜実」「林檎」が、『小学校教師用手工教科書』の第1学年で「梅」「梨」「栗」が、第2学年で「蜜柑」が出てくる。「林檎」と「梨」の形は、次の図を見て分かる通り、似通っている。また、「飾餅」と「供餅」のように名称は異なるが、ほぼ同じ形のものもある。

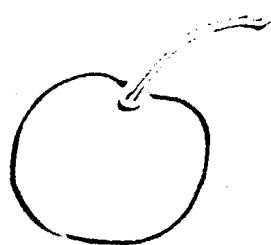
四

佛  
術

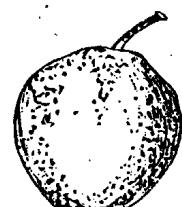
第二十六圖



尺 實

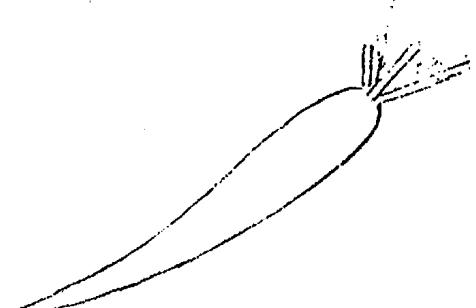


四

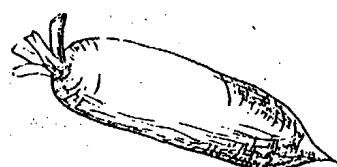
佛  
術

第二十九圖

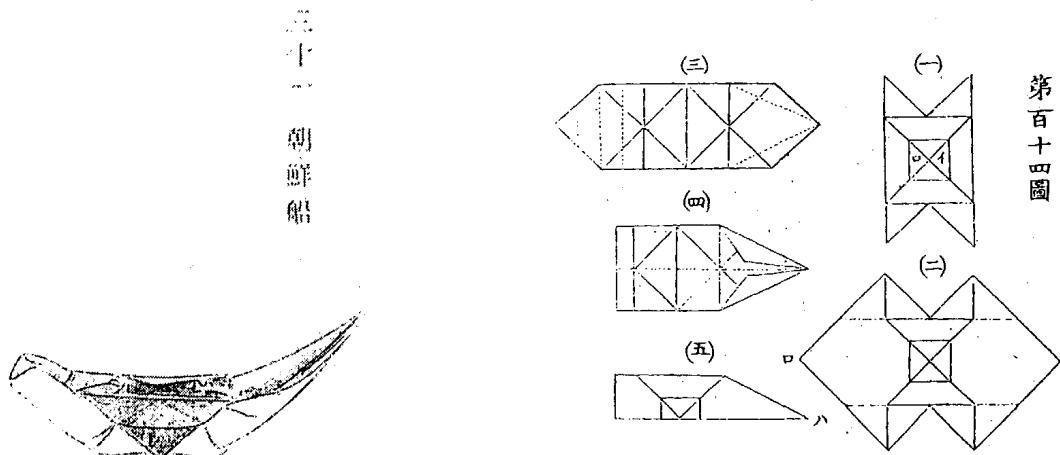
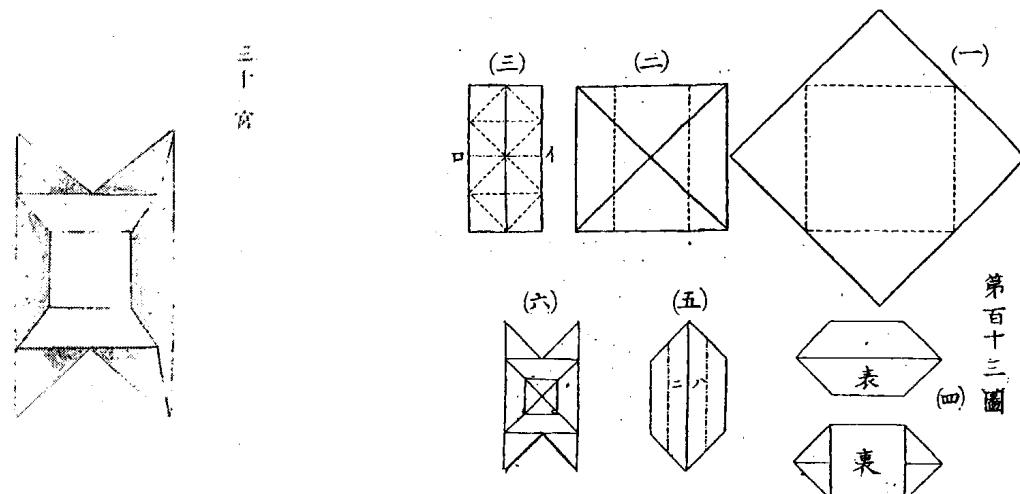
尺 實



第一百一圖



「紙摺み」「折紙」の題目の数は、幼稚園のほうが多く、小学校第1、2学年を合わせた数の3倍程である。第3学年までの折紙全体で取り上げられている具体的な題目は、1回に複数上げられている題目も数えて19なので、3学年分と比べても幼稚園には倍の題目が上げられている。『手技図形』の初めのほうは1～3回折ればできるような簡単なものであり、小学校では取り上げられていない。『手技図形』と『小学校教師用手工教科書』で共通の題目のうち、「蓮花」「二艘船」「帆掛船」は第2学年で、「鶴」は第3学年で取り上げられている。折紙では題目が同じなら同じ折り方の場合が多いが、これらの題目の図は、同じである。図をみると、『手技図形』の「朝鮮船」は、『小学校教師用手工教科書』の「大船」と同じであることがわかる。同様に、「宮」と「扁額」も同じである。折紙に関しては、「鯱」も「鶴」と同様にかなり複雑な折方であり、小学校第3学年と同程度のものが幼稚園でも行われていたであろうことが推測される。



「紙剪り」「切貫」では、「切貫」が第4学年ということもあって、同じ図はみられない。

また、「縫取り」であるが、これも登場するのは第4学年である。そのため「縫取り」では、厚紙を材料としているが、幼稚園の「縫取り」とは違いがみられる。小学校では、女子の裁縫にもつながる位置付けにある。

このように、幼稚園と小学校第1、2学年の重複のみでなく、少ないとはいえ、第3学年や第4学年で取り上げられている事柄が、幼稚園で行われていることをどのように考えればよいのであろうか。

幼稚園と小学校の一クラスの人数の違いや、来ている子どもたちの家庭階層の違いを勘案しても、小学校では簡単すぎる事柄が取り上げられていて、すぐにできてしまった子は退屈してしまい、かえって興味を失ってしまうことになったと思われる。逆に幼稚園では、豆細工や折紙で難しいと思われるが取り上げられ、できない子には保姆が手伝わなければ出来上がらなかつたと思われる。

『小学校教師用手工教科書』には、先に述べた様に「幼稚園の手技に於けるが如き最も簡易なるもの」から始めると書かれていたが、幼稚園における手技の内容を把握した上で、それが幼児の発達程度に合ったものであるのかどうかを検討して、小学校に取り入れたとは考えにくいが、幼稚園の手技とのつながりを視野に入れながら編纂されたことは評価されよう。

## おわりに

この時代の幼稚園は、増加してきたとはいえ、1897（明治30）年の5歳児の就園率が0.9%、1907（明治40）年でも1.5%にすぎなかったので、限られた子どもたちしか通っていなかった。小学校の方は、修了率はさておき就学率は1907（明治40）年には97.4%まで上昇し、義務教育が6年に延長された。さまざまな状況の子どもたちが通学する中で、材料や用具の確保も含めて困難があったと思われる。

小学校の手工教育の基準となり、多大な影響を与えたといわれる『小学校教師用手工教科書』が、手技と手工科の関連や重複を問題視するようになった幼

幼稚園の保母たちに、何らかの影響を与えたのかどうか探ることを、さらなる課題としたい。

## 註

- 1) 『幼稚園恩物図形』東京女子師範学校、1878年。
- 2) 女子高等師範学校附属幼稚園『手技図形』高等女子学会、1906年。
- 3) 上原六四郎・岡山秀吉『尋常高等小学手工製作図』1903年。
- 4) 文部省編『小学校教師用手工教科書』大日本図書、1904年。
- 5) 『婦人と子ども』第3巻第3号及び第4号、フレーベル会、1903年、54~62頁及び61~66頁。
- 6) 女子高等師範学校『女子高等師範学校附属幼稚園保育要項』1906年。
- 7) 山形寛『日本美術教育史』黎明書房、1967年、393頁。
- 8) 同上書、394頁。
- 9) 前掲書4)、「甲」の凡例1頁。
- 10) 同上書、「甲」の凡例2頁。
- 11) 同上。
- 12) 前掲書6)、14頁。

(『小学校教師用手工教科書』に関しては、佐々木享名古屋大学名誉教授に感謝いたします。)